

(様式2)

平成 29 年度

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1590600050		
法人名	社会福祉法人 御幸会		
事業所名	グループホーム・ヒルトップくしがた		
所在地	新潟県新発田市中央町4丁目6番6号		
自己評価作成日	平成29年1月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaignkensaku.mhlw.go.jp/15/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人新潟県社会福祉士会		
所在地	新潟県新潟市中央区上所2丁目2番2号 新潟ユニゾンプラザ3階		
訪問調査日	平成30年3月12日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームはご利用される方々にとっての家庭として位置付けられる施設である。この家庭と云うキーワードに多くの介護に携わる職員が勘違いしているものと考え。家庭です。「どうぞ自由に」といった雰囲気の下、テレビの前でぼんやりと過ごす方々、やることもなく自室で横になって過ごされる方々など多くの勘違いを目にし耳にしてきた。入所に至る事前面接においても、ご家族より「出掛けたら帰って来なくなる。」「車にひかれたら大変だ。」「転んでケガでもしたら大変だ。」といったように必然的にテレビのある部屋でテレビを観ているといった扱いで拘束されている現状が往々にしてみられる。当施設はそういった誤った家庭的な雰囲気を否定するように取り組んでいる。余暇時間は強制するわけでもなく、ご利用者がリビングに集いレクリエーションや脳トレなどを行われる。そこには常に笑いがあり、ご利用者同士や職員との交流が存在する。取組み当初は職員より「デイサービスみたい」と否定的な意見も聞かれたがグループホームは共用型のデイサービスがあることからデイサービスであって問題ない、大いに結構といった思いである。職員も現在の取組みが当たりまえと認識している。何よりご利用者の多くの笑い声が結果として表れている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は遠く山々を望める自然豊かな高台にあり、季節の変化を感じながらゆったりと過ごせる環境にある。

法人は、いくつかの高齢者施設を運営しており、隣接する特別養護老人ホームとは日常的に協力関係にある。また、協力医療機関も系列の病院で、夜間の電話相談にも対応可能であるなど、利用者や家族の安心につながっている。

事業所では脳トレや運動、レクリエーションなど日中活動に力を入れており、利用者は居室に引きこもることなく楽しく参加している。また、外出の機会を多くもつように心がけ、毎月の外出行事のほか少人数で馴染みの場所に出かけたり、ドライブや散歩、薬取りやおやつのお買い出し、ゴミ出しなど、様々な機会をとらえて外に出られるよう工夫している。

家族との関係も良好で面会も多い。毎月のたよりに担当職員がコメントを添えたり、調理レクなど行事に参加してもらったり、担当者会議に出席してもらうなど、家族と交流し、情報を共有して信頼関係を築いている。

「笑いの絶えない家庭づくり」を理念にかかげ、職員も明るく、職員間のコミュニケーションも良く取れており、利用者一人ひとりを大切に支援が実践されている。今後も地域に根ざした、より質の高い事業所づくりが進められていくことが期待される事業所である。

自己評価および外部評価結果【すずらんユニット】

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念はご利用者の記憶にも残るように単純明快なものとしている。理念は家族通信や地域に配布される広報誌にも明記され、広く理解されていると認識している。行動規範も策定し、実践することで理念の実現に努めている。	事業所開設時の全体会議で職員が意見を出し合って理念を作りあげた。理念を玄関に大きく掲示し、広報紙にも載せており、職員によく浸透して日々の支援に活かされている。毎年、年度初めに行動規範を立てる際にも理念を念頭においている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設で開催されるイベントでは多くの地域住民が来所される。地域で開催されるイベントは頻繁にあり、毎回お邪魔させて頂くことで再会を喜ばれる場面をよく目にするようになっている。スーパーはじめ買い物できる場所はないが、床屋さん等付き合いは長くなっている。	隣接する同法人の特別養護老人ホームの敷地で毎年行われる夏祭りには小学生をはじめ大勢の地域住民の参加がある。また、歌や民謡、ハーモニカサークルなどのボランティアや小学校の総合学習の受け入れも行っている。近くのコミュニティーセンターの祭りや自治会館の大掃除、近くの不動尊の祭りに出かけたり、年2回発行の広報紙を3つの地域に回覧するなど、地域との交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年に二回発行される広報誌を地域に回覧している。広報誌を拝見されることで施設での活動や取り組みが理解されているものと認識している。また、集落からの面会や施設見学も増加傾向にあり、認知症対応型の施設として理解が広まっているように感じる。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ひやりはっと、事故報告書等の年間集計による発生時間帯や原因を分析して報告、及び意見を頂戴している。また、嗜好調査をもとに、外食時にどういった飲食店が適しているのか情報を頂いている。その他、畑作業に係ること、地域でのイベント情報など幅広く情報を頂戴している。欲を言えば地域包括担当者より、地域での課題や取り組みなどの話を頂きたい。	会議は、利用者、家族、地域の区長、民生委員、民生児童委員会、地域包括支援センター職員、隣接の特別養護老人ホーム施設長、管理者、介護職員2名をメンバーとして開催されている。事業所の状況報告のほか、感染症防止などその時々々のテーマで話し合わせ、助言をもらったり、地域の情報をもらうなどして運営に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	法制度、条例等の改正もなく、連絡を密にとる必要性はない。事業所の活動や取り組みは運営推進会議における地域包括担当職員より市担当者へ伝えられている。事業所からのお願いや連絡を必要とする際は、気兼ねなく連絡できる関係にある。	運営推進会議に毎回出席の地域包括支援センター職員を通じ、事業所の状況、取り組みが市の担当者に伝えられている。また、市の担当者とは会合等で時々同席し、必要なときはすぐに電話するなど連携が図られており、市主催の研修はメールで案内が来る。市内の事業者との交流会にも参加し情報交換している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	新しく入所されるご利用者に帰宅欲求がみられ、玄関に向かわれる場面をよく目の当たりにする。全職員が施錠禁止（行動制限）を理解してケアに取り組んでいる。また、職員各々の慣れから言葉の抑制が聞かれる時があるが、その際はお互いに注意喚起を行っている。	身体拘束排除マニュアルが整備されており、毎年、内部研修を行っている。玄関の施錠は午後8時から午前4時の間とし、外出欲求のある方にはできるだけ散歩やドライブで対応するようにしている。センサーマットを使用している方もいるが、1ヶ月に1回事故防止委員会で振り返りを行い、想定される危険について話し合い身体拘束のないケアの実践に取り組んでいる。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法については前年度の内部研修において学ぶ機会を設けた。今年度は当事業所内の虐待について考える研修を企画した。また、虐待における大きな要因となる職員のストレスにおいても、緩和に繋がるような業務体制を考慮している。	虐待排除マニュアルが整備されており、内部研修も実施されている。事故防止委員会で不適切な対応について話し合い、職員間でも言葉遣いなど注意し合っている。職員のストレスにも気を配って、残業の軽減、希望休の実施、シフトの配慮などを行っている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用されているご利用者がいる。職員は成年後見人が行える事務について理解しており、出来ない事においては協力し合える体制にある。また、日常生活自立支援事業や成年後見制度の必要性を感じた際は案内、説明できる体制にある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	これまでの契約の締結や解約における、ご家族の不安や疑問に上がったことは、予め説明を行うように心掛けている。往々にしてその場での不安や疑問は生じ難く、不安や疑問が発生した段階でお知らせ頂くように伝えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設けている。形式的な意見箱となっている観は否めないが、ご利用者、ご家族共に顔を合わせた状況で意見、要望が伝えられる関係にあると感じる。意見、要望として汲み取られたものは、対応策を講じた上で書面にまとめ、掲示と共に運営に反映させている。	利用者については日々の会話の中で、家族については意見を出しやすい雰囲気づくりに努め、面会時、サービス担当者会議、運営推進会議などの機会に意見を聞いている。出された意見は「要望・意見受付書」などに記載して職員間で共有し、日々のケアや運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	大勢が集まる会議や管理者との一対一での場面では、なかなか意見や提案が出にくい風土となっている。少人数によるBS法を用いることで、意見が出やすくお互いの考えや思いの把握、しいては業務の改善に繋がっている。	毎月のユニット会議や各委員会、全体会議などで職員の意見を聞いている。ユニット会議はコーヒーを飲みながら行うなど意見が出やすい工夫をしている。出された意見は運営に反映され、内容によっては管理者から法人に伝えられている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	サービス規定や就業規則があり、事業所で出来ることは限られてくるが有給休暇が取得できるように仕組み、時間内に業務が完結できるように業務スケジュールを立てている。勤務状況や業務成績をもとに代表者は昇給、賞与の査定を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者の判断で必要と思われる外部研修は参加、復命をお願いしている。内部研修は月に一回実施しているが全職員の出席が難しく、出席できない職員は回覧による確認となっている。また、経験年数の浅い職員については、リーダー職員による相談や個別指導の機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣にあるグループホームを訪ね、職員とご利用者が交流を深める機会を設けた。夏祭りや総合学習の受入においては施設合同で行うことにより、職員間の協働や交流が図られる機会となっている。委員会や会議も他施設と合同で行われることにより意見の交換の場となっている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所面接時は施設入所について知らされていないケースが多く、入所後に関係を構築して行くことになる。アセスメント時に困っていること、不安なこと、要望等が聞かれた際はシートにおとし、ケアにおける成功体験や上手い対応など全職員が情報を共有できるように行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所面接時や施設見学時に困りごと、不安、要望、特に当施設に期待することについて聞き取りを行っている。契約時には、これから発生するであろう不安や分からないことなど随時お知らせ頂くように案内を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	地域内に複数の関連施設がある。毎月定例で相談員会議が行われ、サービスに迷いが生じるケースは懸案事項として関連施設で協働となる。ご本人、ご家族において最良のサービスが提供できるように法人全体で取り組んでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	キッチン内での作業、畑仕事、掃除などは職員がご利用者に依存しているのではないかと思うくらい良好な関係だと感じる。ご利用者各々もご自分の役割を理解していることから、責任感や他の方の役に立っているといった思いを感じることができる。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	多くのご家族が毎月面会に訪れてくださり、その際に近況をはじめ情報交換を行っている。選挙や外食、美容室など一緒に出掛けられることも多くご利用者の喜びとなっている。また、ご家族を招いて施設で一緒に食事を摂る機会も設けている。	毎月発行のたよりに担当職員のコメントを載せるスペースを設けたり、面会時にはお茶を出してくつろいでもらいながら日頃の様子を伝えるなど、家族との情報共有に努めている。家族の面会は多く、外出、外泊の協力も得られている。年1回の調理レクでは畑で採れた野菜を使ってカレーを作るなど家族にも一緒に時間を楽しんでもらっており、家族の参加が年々増えている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご利用者が馴染みの場所に行き、懐かしの方と再会出来るように取り組んでいる。方面別に少人数で訪れることでゆっくりと時間も取れ、感動の再会の目撃者となることもある。	家族の話や利用者との日常の会話の中から馴染みの人や場の情報を得ている。2~3人の少人数で馴染みの場所を訪ねる計画を立て継続している。また、家族の協力を得て、入居前から利用している美容室に行ったり、墓参りや外食、外泊も行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中において、全てのご利用者が自室で過ごされる時間が殆どない環境である。強制ではなく、皆が「退屈」、「寂しい」といった理由でリビングに集うことになる。裏を返せば、リビングにおけるご利用者同士の関わりや楽しさをご利用者自身が感じていると認識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了時に困ったことや相談相手が必要な際は、いつでも連絡をくださるよう案内している。また、転居先の施設へご利用者と一緒に面会に訪れることで双方の喜びとなっている。他にも当施設で過ごされた写真を記念にしたいとプリントを希望される際も快く対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	全てのご利用者をご自分の意思を伝えることが可能である。かしまって希望や意向を確認してもなかなか本音は出てきにくいことから、日常会話で出てきた話、特に入浴時の一対一での話は参考となる事が多い。これらの思いや希望はユニット会議や申送りでも共有化に努めている。	家族の話や日常の会話等から思いや意向の把握に努めている。リラックスしマンツーマン対応となる入浴場面で聞ける話も多い。得られた情報は介護記録等に記載すると共に申し送りやユニット会議で共有され、ケアに活かされている。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	初期面接の際に生活歴や生活スタイル、生活環境、サービス利用の経過について聞き取りを行っている。サービス利用に関しては、事業所に利用の様子を確認している。当施設入所後に困惑することなく日常生活が継続できるように努めている。	自宅からの入居が多く、自宅を訪問して本人や家族と面談し、これまでの暮らしやサービス利用等について聞き取るほか、以前利用していたサービス事業所からも情報を得ている。入居後も日々の会話の中で得られた情報も記録して職員間で共有している。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入所時と定期的にセンター方式を用いたアセスメントを行っている。アセスメントに基づいた生活様式が多くのご利用者で確立しており、普段と異なった動作、行動は心身の変調として職員間で共有出来ている。また、日中もリビングで皆と過ごされる方が多く、必然的に職員と共有する時間も多くなっている。その事が心身の状態の把握、能力の再発掘に繋がっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面会時や家族通信を利用することでご家族と職員間の情報交換は行っている。健康管理においても職員が通院介助を行うことで主治医からの指示等において関係者に周知できるようになっている。関係者が十分な情報をもとに、ご本人の現状に即した介護計画を作成している。	毎月、担当職員が介護計画の実施状況表に記入し、3ヶ月ごとにモニタリング、6ヶ月ごとに計画の見直しを行っている。見直しの際には家族にも参加してもらって担当者会議を行い、ユニット会議での職員の意見や医師の指示も反映させて計画を作成している。状態変化時は随時家族とも相談し、見直しを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常の様子、ケアの実践は個別記録に漏れなく記入をしている。記入においては普段と違った様子に特に注意を払い、言動、思い、行動、様子、ケアでの成功事例、失敗事例など職員間で情報の共有を行い、介護計画の作成に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入所前からのかかりつけ医の受診においてもご家族の状況によっては職員で対応している。また、届出等の手続きにおいてもご家族の状況によって代行している。ご本人からの突発的に生じるニーズにおいてリアルタイムでの対応が難しい場合は日程を調整して実現できるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	集落には菅谷不動尊、床屋、小学校、コミュニティセンター等の施設が存在する。これらにまつわる祭事や催しは地域の方々と顔を合わせる機会であり、また、昔からの伝統行事を懐かしみ楽しむ機会ともなる。地域資源の活用が施設とご利用者に大きな活力を与えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所以前からのかかりつけ医の継続、入所後の医療機関の変更はご本人、ご家族のご希望となっている。協力医療機関への受診は職員付き添いのもとに行い、以前からのかかりつけ医の受診もご家族の状況によっては施設職員で対応するなど柔軟な支援となっている。	かかりつけ医については利用者、家族の希望により決めているが、事業所の協力病院には職員が付き添って定期受診し、夜間対応もあることから協力病院に変更する利用者が多い。それ以外の医療機関を利用する場合も医師、家族と情報共有が図られるよう努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の配置、訪問看護の契約は行っていない。24時間、365日において協力病院で対応が可能であり、ご利用者のちょっとした変化においても連絡することで指示が受けられる。医療連携加算は算定していないが、算定基準以上のサービスが提供できていると認識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院が系列であることから、入退院に際しては行き場所に困ったり、心配事の軽減に繋がっている。入院期間中も病院側からの情報の提供があり、病状の把握や退院の目途が立てやすい。また、必要時に施設側からの確認等においてもスムーズに情報が得られる環境にある。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に、状態が落ちてきた際は併設する特養へ入所できるように支援する旨説明を行っている。状態の低下がみられ始めた際は、面会時などご家族へ案内を行い、ご利用者の現状が受容できるように関わっている。特養入所に当たっては強制であってはならず、ご本人、ご家族の要望や意向に沿って支援を行っている。	入居時に、契約書に沿って事業所で対応できること、できないこと、重度化した場合の特別養護老人ホームの利用などについて説明している。また、状態の変化があった場合はその都度、医療機関とも連携しながら今後について家族と話し合い、方針を共有している。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時、事故発生時のマニュアルは職員が閲覧できるように準備されている。毎年急変時の対応研修を実施しており、毎月事故防止委員会を開催している。大事故に繋がらないように、未然に防げるように、ひやりはっと、ニアミスの事例を積極的に取り上げるように全職員が努めている。	事故発生時の対応マニュアルが整備されており、AEDや吸引器具、酸素ボンベを設置し、定期的に訓練や使用方法の確認を行っている。また、事故防止委員会では想定される危険を職員にあげてもらい、その対応について検討している。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年度初めに地域の防災組織について地区区長様と話し合いの機会を設けている。有事の際はお互い協力できる関係となっている。年二回の防災訓練は当然となるが、地域の消防団が一同に会し行われる放水訓練にも参加させて頂いた。	災害発生時の対応マニュアルが整備されており、年2回、避難訓練を実施し、うち1回は消防署の立ち合いのもとで行っている。また、平成29年度は消防団に建物や消火栓を確認してもらっている。有事の際には区長に連絡すると地域の自主防災組織から救援が駆けつける体制がある。3日分の食料の備蓄も行っている。	夜間や地震を想定した避難訓練が毎年の実施されていないので、毎年計画することを望みたい。また、今後は地域の防災訓練にも参加することを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎年プライバシーの尊重に係る研修を行っている。職員もご利用者が長くなっていることから、良好な信頼関係と馴れを勘違いしがちである。研修では気になる言葉かけや対応について意見を出し合い、それぞれの振る舞いを見つめ直す機会としている。	毎年、接遇に関する研修を実施しており、職員は利用者一人ひとりの人格を尊重し、プライバシーに配慮したケアを心がけている。言葉遣いについては命令口調にならないよう工夫したり、また、職員間で注意し合う関係ができています。個人情報に関わる記録などは、鍵のかかる場所に適切に管理されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	殆どのご利用者が希望や思いを表出できる機能を有している。上手く自己決定出来ない際には、選択肢を設けるような働きかけを行いご利用者の判断で決定出来るように努めている。職員主導であってはならず、ご利用者本位で係るように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎朝その日の過ごし方について希望を取るような事は行っていない。ご利用者各々には日課とも云える家事作業があり、各々がプライドを持って当たられている。その日の過ごし方として希望が聞かれた時は、希望に沿うように支援しているが、その日のうちに希望通りに行かない際は日を改めて希望に沿うように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時は自室の洗面台(鏡の前)に立ち、ご自分で整容を行って頂くように関わっている。鏡の中の自分を見る事で表情も変わり丁寧にブラッシングをされている。カットや毛染めもご希望があれば職員と一緒に馴染みの美容室へ行けるように支援している。入浴時の着替は職員と一緒に好みの衣類を選択している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ご利用者各々の状態に応じて役割りが確立している。長時間の立位保持が困難な方でも座って行える作業は多く、皮むきや盛付けなどの作業後にねぎらいの言葉を掛けると誇らしい表情がみられる。そのことは職員の喜びでもあり、お互い良好な関係で食事の時間を過ごしている。	食材は外注業者に依頼しており、メニューも業者の栄養士が作っているが、嫌いなメニューの代替食も提供してもらっている。定期的に業者も含めた栄養委員会を開催し、嗜好調査を行うなど、より良い食事の提供に努めている。調理、盛りつけ、配膳などできる範囲で利用者に手伝ってもらい、職員も一緒に食事を摂っている。家族を招いての食事レクなど食事を楽しむ工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量は全ご利用者の管理を行っている。食事制限や栄養が不足しがちな方は主治医の指示の下で適切な食事の提供に努めている。また、嗜好調査を行い、施設での提供が困難となるようなメニューに関しては外食の機会を召し上がられるように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	全てのご利用者が洗面台にて口腔ケアを実施している。言葉かけが必要な方もいるが、自己にて義歯の洗浄を行うことが出来る。必要な方には舌ブラシも併用することで清潔や肺炎の防止に努めている。義歯の消毒に限っては職員で行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の失敗や皮膚トラブルの予防から排泄パターンの把握に努めている。排泄パターンを把握することでリハビリパンツの使用がなくなった方や尿取りパットの汚染頻度が減った方がいる。	排便チェック表の活用や申し送りで一人ひとりの排泄パターンの把握に努め、できるだけトイレで排泄できるよう言葉かけや誘導を行っている。リハビリパンツの使用を減らすよう心がけ、2名の利用者が布パンツに改善された。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防と身体機能の維持を目的に、全てのご利用者の日課に運動や歩行訓練が取り入れられている。運動や水分量を確保することで自然排便に勤めているが、排便困難の際は主治医の指示のもとで下剤を服用することとなる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	日常生活を送るなかで、ご自分から入浴を希望されたりする方がみられない。職員から希望の確認を取ることでようやく「それでは」と云った感じである。入浴中は職員と一对一の環境であることから会話も弾み、ゆっくりと過ごされている。時期になると菖蒲湯や柚子湯にて昔を回顧されるひと時もある。	週3回入浴を心がけており、拒否のある方には時間をずらしたり、日を変えるなど工夫をして週3回入浴ができています。ゆず湯、しょうぶ湯などのかわり湯を提供したり、職員とマンツーマンの時間を楽しんでもらい、昔の話や本音を聞かせてもらえる時間にもなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	多くのご利用者が早寝早起き、日中は活動的に夜は快眠のスタイルにある。強制にはないが、多くのご利用者が日中も居室で休まれることはなく、リビングで皆と和気藹藹に過ごされることを望んでいる。ご家族もこの様な活動的、他者と楽しくと云った思いの方が多く、余所のグループホームとは一線を画していると認識している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が通院介助を行うことで、処方薬の変更等があれば直ぐに情報の共有が出来る状況にある。その都度、主治医からの使用目的や指示も申送りすることで、次回の診察日に経過や容態について報告できるようになっている。服薬の支援に当たっては薬のセットから服薬時、服薬後など幾つもの過程においてダブルチェックを行いミスのないように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	朝早い時間から「起きてもいいですか?」と確認される方が何名もいる。皆が集うリビングに早く行きたいと願う表れとを感じる。それだけでも生きる活力であり、生活の場面場面でも全てのご利用者に関与がある。ご利用者が達成感、喜びが感じられるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご利用者からの「天気が良いから出掛けたい。外に行きたい。」と要望があれば、散歩やドライブは頻度高く出掛けている。ご利用者からの要望がなくても外気浴の思いが職員にあり、ゴミ捨てなど散歩気分と一緒に出られる。お盆には墓参りで外泊される方も多く、また、温泉に出掛けて泊まって来られる方もいる。ご家族も協力的な方が多く、一緒にご利用者を支えている印象である。	毎月1回全員での外出行事や少人数での馴染みの場所への外出等を計画し実施している。ドライブや散歩は日常的に行われ、薬を取りに行く際やおやつや買い出し、ゴミ捨てなども利用者で行くなど外出の機会を増やす工夫をしている。また、家族と一緒に外泊や外出、外出に出かける利用者も多い。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全てのご利用者が毎月一回以上は外出し、飲食や買物をする場面がある。職員も会計はご利用者が行うものと認識しており、全てを委ねるかたちになっている。施設内でお金を所持している方も数名みられるが、基本は職員管理となっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	居室に電話を引いている方はいないが携帯電話を利用している方がいる。また、事務所内の電話は自由に使用可能であり、ご希望時や職員の配慮にてご家族と電話される事がある。暑中見舞いと年賀状は全てのご利用者の恒例となっており、年々ご家族から施設ご利用者に届く年賀状も増えてきている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活動線上、障害となるようなものは排除して快適性、事故の防止に努めている。掲示板にはイベント時、外出時の写真を掲載することで、ご利用者同士が写真を見て談話されている場面を目撃する。リビングの装飾は飾り過ぎず、季節感のあるものとなっている。季節に応じて室温、湿度管理も徹底している。	テーブルなど家具の配置は危険がなく使いやすいように工夫されている。壁面には利用者の作品や季節の装飾、行事の写真が飾られ、落ち着いた居心地良い雰囲気となっている。また、気になる臭いはなく、加湿器を置いて乾燥対策に努め、1日3回は換気を行って室内の温度や湿度に配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースが限られており、独りでゆっくりと云うことは難しい。独りでゆっくりされたい方は居室に行かれ思い思いの時間を過ごされる。共用スペースでは気の合ったご利用者同士が時間の共有を図れるように席次に配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に使い慣れたもの、馴染みのものを準備して頂くように説明している。多くの方がご家族の写真が飾られているが、ご利用者各々に居室に対するこだわりは感じられない。ご利用者にとって居室は寝る場所として位置づけられており、日中は皆で賑やかに過ごされることを望んでいる表れでもある。	入居時に使い慣れた物を持ってきてもらうよう伝えており、居室にはそれぞれテレビや家族の写真などが持ち込まれている。また、利用者の作品や行事の写真が飾られ、その人らしい居心地の良い居室づくりが行われている。居室は毎日、職員が朝食後に掃除しており、清潔に保たれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ご利用者各々の能力に応じて出来ることは一杯に行っている。「包丁を使う方」「立ち仕事の方」「座って行う方」「畑に行かれる方」「ゴミ捨てに行かれる方」ご利用者各々がお互いの役割を理解して施設での可能な自立生活が営まれている。		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				